

# ニッポン

ドクター和の

# 臨終凶巻



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医科大学第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で在宅医療を始める。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

「私には 余生などないよこれからぞ」。これは聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生が、104歳のときに詠んだ俳句。先生は98歳で俳句を始め、104歳で句集『10月4日 104歳で104句』を出版しました。

その夏、私は聖路加国際病院に日野原先生を訪ねました。先生は、私が副理事を務める日本尊厳死協会の会員になられていたのです。そのとき、私にこんな話をしてくれました。

「あなたはマルティン・ブーバーという人を知っていますか。人は創

## 17 日野原重明



（はじ）めることさえ忘れなければ、いつまでも若くいられると説いた哲学者です。もう歳だから新しいことはできない、そう思った瞬間から人間は老いる。だから長尾さんも医者として、まだまだチャレンジしてくださいよ」

なんと奥深い言葉でしょう。そ

して固く私の手を握ってくださいました。医学の奥深さを私に教え続けてくれた永遠の師が、巨樹が静かに倒れるようにして7月18日、天に召されました。105歳と9カ月の人生でした。

先生が、体調不良で入院し、口から食べられなくなったのは今年3月のこと。主治医は先生に2つの質問をしたそうです。

- ①経管栄養や胃ろうをしますか
  - ②自宅に帰りますか
- 先生ははっきりと①には「やらない」と、②には「帰りたい」と答えたそうです。

そこから4カ月間、とても穏やかで平和な日々を自宅で過ごされたそうです。最初は、家族の皆さんや主治医や看護師さんに向かって「ありがとう」と言葉を残すの（？）として旅立ったと、告別式で長男が話しておられました。

先ごろ旅立たれたフリーアナウンサーの小林麻央さんは、夫で歌舞伎役者の市川海老蔵さんに「愛している」と遺し旅立ちました。しかし医師の中には、死ぬ際に言葉など言えるわけがない、妄想ではないか、と主張する人も多くいました。

そういう医師は残念ながら、過剰医療の果ての「延命死」しか見たことがないのでしょう。「尊厳死」では最期まで話す人は珍しくありません。今回、日野原先生もそれを証明してくださいました。尊厳死、平穏死を提唱する町医者として私の方こそ、ありがとうございます。そうです、という気持ちです。

日野原先生の死因は「呼吸不全」となっていますが、私が主治医ならば「老衰」と書いていたはず。主治医の先生は、聖路加国際病院の院長ですから死因欄に何か病名をつけることが慣例なのかもしれない。しかし見事な老衰、見事な尊厳死でした。

何を隠そう、日本において一番はじめに終末期医療に尽力したのが日野原先生でした。その教えを胸に、私も創めることを忘れずに終末期医療に邁進し、余生など考えず、患者さんのために死ぬまで生きたいと思います。

# 自ら示した尊厳死